
UBUSUNA

そこにあったのは、まるでフィクションのような世界だった。

産土とは、或る土地のことであり、またその土地の守り神のことをいう。人が生まれる前から死んだ後まで、その人のことを守り続けると信じられて来た。

今、都会に住む僕らが忘れてしまい、もはや誰も顧みなくなった「日本」という大きな産土の姿を、僅かにでも、少しだけでも、もう一度取り戻すため、長岡参を中心とした6人の作家たちが北は山形から南は沖縄までをキャラバンを組み巡回した。

悪化する一方の森の問題、限界集落や獣害や土砂災害、または山の奥地にある集落の現在……。そしてそこに棲む山師たちやマタギ、有機農家、そして山伏、はたまた沖縄の漁師に至る人々たち。一見無関係に思えるそれらの物事を重ねて結び、なにかを浮かび上がらせるため、歩き、見、聴き続けた。

これはその記録である。

【撮影・取材場所】

徳島県那賀郡那賀町木頭／長野県飯田市／山梨県早川町／山形県鶴岡市、西置賜郡飯豊町／島根県吉鹿足郡吉賀町柿木、益田市匹見町／沖縄県南城市知念久高

staff

「森と暮らし探訪キャラバン」委員会

委員長：真田純子（徳島大学）
委員：田口太郎（徳島大学）
委員：トム・ヴィンセント

【撮影補助／録音／制作】

堀川ジュリアン健太
川口泰吾

【ラインプロデューサー】

荒川あゆみ

【プロデューサー】

長岡参
トム・ヴィンセント

【監督】

長岡参

キャラバン隊について

今の日本の「現在」を知りたい――その思いを掲げキャラバン隊を募集した。日本人だけの狭窄な視点ではなく、外国人の目線から色眼鏡のない「現在」を撮影できないかと考え、アジアを中心とした作家に連絡を取り、参加を呼びかけた。徳島の小さなNPOが主催するプロジェクトにも関わらず、多くの応募があり、その中から以下の作家たちが選定された。

なにせ「秘境」と呼ばれるような場所へのロケが中心である。映像だけ見ればなんとはない普通の光景のように思われるかもしれないが、険しい道を幾度も通ったり、山の斜面を重い機材を背負って歩いたり、ヒルに血を吸われたりと、撮影のための移動だけでも難航を極めた。また長時間粘って滞在できるわけではなく、長くても一週間程度の滞在しか出来ないため、まさにキャラバンの映像は、現場での一期一会とも言うべき出会いや縁の賜物となった。行った日がたまたま数十年ぶりの祭祀の日だったり、たまたま詳しい人が仕事が休みでいたり等々と度重なる偶然が、まるで必然のように重なったキャラバンであった。



Ben Ruffell

ベン・ラッフェル

【参加キャラバン：山形県鶴岡市・飯豊町】

ニュージーランド、クイーンズタウン在住、撮影監督。これまでにナイキ、ヒューレッドパッカード、ヒュンダイ、カシオ、ボーダフォン等数々の大手企業の映像を制作。ニュージーランドを代表するDP（撮影監督）である。



John W. J. Cho

ジョン・チョー

【参加キャラバン：島根県吉賀町】

マレーシアを代表する若手映像作家。『The Apprentice』が2012ショートショート映画祭アジアにて上映。その他受賞多数。



Kirsten Tan

キルスティン・タン

【参加キャラバン：沖縄県久高島】

シンガポール若手ナンバーワンと言っても過言でないほど、数々の賞を総嘗めにしている映像作家。40以上の映画祭でノミネートされ、数々の国際映画祭で受賞した経歴を持つ。現在ニューヨークにてコマーシャル等を中心に活躍している。



長岡 参

ナガオカ マイル

【参加キャラバン：全キャラバン】

千葉県出身、2010年から神山町在住の映像作家。フリーランスとして活動後、グリーンTVジャパンのCDを経て、トノループ・ネットワークスの社員として神山にて勤務後独立し、長岡活動寫眞を立ち上げる。女木島の祭を取材した『鬼ヶ島の祭』が、トヴェリ映画祭METERS審査員特別賞、受賞。



Jean Philippe Martin

ジャン・フィリップ・マルタン

【参加キャラバン：徳島県木頭村】

フランス、シャロン＝シュル＝ソーヌ生まれ。現在早稲田大学博士課程で現代演劇を中心に学んでいる。過去に長岡の映像プロジェクトを手伝っていたことが縁で、今回のキャラバンに加わることに。



Rufas Ward

ルーファス・ウォード

【参加キャラバン：
長野県飯田・山梨県早川】

イギリス、エディンバラ出身。アートスクールを卒業後、神山に移住したアーティスト、画家。様々なジャンルで作品を発表している。今回は神山に住んでいることが縁で、キャラバン隊に加わることになった。

徳島県那賀郡木頭村



たまたま網に掛かった鹿を捌く大城慶太郎さん。捕れたものを食べることこそ、供養という発想がある。80代にしてなお矍鑠とされているが、若い頃に木馬運びで痛めた足の古傷が、ずっと痛むという。が、それにしても休むということを知らないのではと思うほど、ずっと動いては何かを作られている。例えば、古いヤスリからナイフを作ってしまったり、大きな机を作ったりすることは彼にとっては朝飯前のこと。幼少の頃から山で遊び、働いていたため、誰も真似の出来ない「山のデータベース」とでもいうべきものが彼の内部に残されている。



二年漬けていた野いちご酒をふるまってくれた前浦義美さん。近年は山の仕事が減っているという。「気楽に仕事をやっている」と言われるが、山の仕事は驚くべきほどハードなものだ。そして、彼もまた山仕事の後はゆずの手入れをしたり、川魚を釣りに行ったりと休まない。





神山からでも二時間以上車を走らせた高知県に近い山中に、木頭村はある。そこまで木材を運搬する道はかつて「地獄街道」と称されたほどの危険な場所だった。

なんでもダンプカーの半分は道からはみ出ていて、運転手はドアを空けたまま運転し、いつでも飛び降りれるようにしていたと。そんな辺鄙な土地であったがために、一世代前では、一生そこから出ない人も多くいた。またそのような場所だったからこそ、外部からの影響をあまり受けなかったためか「文化的ビオトープ」とも言うべき、数多くの土着伝統が未だに残っている。



御朱印山の山頂で、木材を切り出し、ワイヤーで運びだす危険な仕事を特別に撮影させてもらった。雨天以外は、ずっと休みなくその仕事が続けられている。かつては斧で伐り、堰を作って川から流していたものが、チェンソーで伐り、ワイヤーで運び、林道から車で運ぶように推移したとはいえ、山仕事はなお険しく、大きな事故があとをたたない。



御朱印山の山頂で、巨木が倒れていた。このような大木が倒れることは、昔では考えられないことだったそうだが、近年そのような事態が目立つようになってきたという。が、ここの土は未だに「フカフカ」であった。「これが本来の山だ」と山師が懐かしそうに語るのが印象的だった。

5

徳島県那賀郡木頭村



伐採後のブナの切り株。山師たちは、伐ってはいけないことを自覚しつつ、それでも伐らなければならない。
無論、生活のためである。



取材中に到来した台風と豪雨のため、県境のトンネル前の道が決壊してしまった。鉄砲水や斜面の崩落は年々激しくなってきている。



長野県飯田市遠山郷底稲集落

「あそこで9年間育っているんで、いろいろな思い出はありますけどね……」



元々は山の神の祠だったと推察される屋代跡。神木が伐られてしまっており、もはや誰も参詣することはない。



30年以上前には、ほとんどの住民が出て行ってしまった底稲集落出身の緑川実男さんに底稲を案内してもらった。

彼は下へと移住した「最後の住民」の一人であり、最も若い出身者だ。現在は、底稲から下の平地に住まわれ土木業をされているが、まだ家に年に数回通って、家と木々を守られている。電気は近年止まったが、まだ水は出るという。落石が無造作にいくつも転がっている、もの凄い山道を上がっていくこと30分ばかり、森となってしまった集落跡の中に廃墟と化した神社と、売られてしまった神木の切り株。鹿や猿が荒らしたと思われるビンや缶や小さな生活用具がそこらじゅうに点在している。鹿の口によって丸裸にされた杉や白樺の木々の僅かな隙間に目をやると、うっすらと家らしきものがいくつか見えてきた。

山梨県南巨摩郡早川町

ここは日蓮の逸話からある種の聖地となっている町である。ここもかつて、秘境中の秘境と呼ばれ、陸の孤島と化した集落が数多く存在する。

早川の中心部からいくつものトンネルを抜け、険しい道を抜けた先に、奈良田というダムに沈んだ集落がある。その奈良田出身で温泉を経営され、猟師でもある深沢守さんからは、奈良田には信玄のハッパ（＝忍者）が住んでいた説があると聴く。ダムになるにあたって古い家を取り壊した時、天井から大きな仕込杖が出てきたそうである。彼は父親が残してくれた木を使い、温泉施設を作った。



深沢守さん



鹿が大量に発生して困っていると云う。近年原因不明にほとんどの笹が枯れてしまったことも、鹿が里へ下がってきた理由の一つだと彼は語る。



茂倉集落。推察できる人口は全部で30〜40人程度といったところ。



深沢礼子さん



早川の中心部と奈良田の間から山へかなり進んだ山中にある茂倉という名の集落に住む深沢礼子さん。彼女に頼み、数週間前に凡そ50数年ぶりに催したという雨乞いの儀式を再現しもらうことになった。

「雨乞い」である。誰が21世紀の只今にそんなことを未だにやっていると想像できるだろう。茂倉に着くと、カイトバタケ（傾斜地にある畑）の中に様々な野菜が植わっており、塗炭屋根の建物が散見できる。はるか昔から、というよりは比較的新しく開拓された集落なのだろう。尋ねてみれば、やや昔に「茂倉鉱山」という鉱山があり、そこが雇用の場になっていたため比較的文化的な生活をしていたのだ、と答えてくれた。

深沢さんの号令の下、続々と村人が集まってくる。みな一様に背丈が小さい高齢者である。後で訊いたところ、村人の8割方が集まってくれたようだ。なんという結束力だ。「誰か誘ったら、他を誘わないワケにはいかないでしょ？」という深沢さん。Iターン等の部外者が入ってくることになるとしたらどう思うか？と尋ねると、無理ではないが村の行事や仕事を共にやってくれなければ無理だという答えが反ってきた。地方の村での自給自足生活で、夢の桃源郷をと望む都会人間との乖離がここにはある。強烈に。

雨乞いの儀式をちゃんと行うのは、実に50数年ぶりだと云う。皆忘れてはいたものの、すぐに思い出してくれた。村人たちは神社の境内をグルグル回りだし、「せ〜をだして〜たも〜れ〜」と輪唱し始めた。手にはバケツやガラス瓶などを持ち、それを叩きながら回りだす。天狗やお天道様に祈るのだという。



彼らの旋回が終わった途端、雷が轟音を立てて落ち、雨が降ってきた……。矢継ぎ早に、同時多発的にあちこちでしゃべりが始まる闊達な茂倉の女たちの会話。が、連れ合いが亡くなってしまった方が多く、普段は家で一人寂しくテレビを見ていることがほとんどだと云う。



「近くの人でね。あの人なんちゅう人だっけな名前、ももよさんって人がね、畑で大豆をつくってた。猿が来てふっと捕って食べとる。それを何か持ってって、ぽんと引っ叩いた猿って。猿ものろまだったけど、ももよさんも早かったんだよね。ほいたら猿がひっくり返っちゃって、叩いて殺しちゃったって。ほいたって、もう猿捕り、ももよさんちがね。やー名前、出たですよ。その人元気なおばちゃんでね。猿をね叩いちゃった。ほいて見たらびっくりするじゃんね。胃袋の中、豆がぎっしり入ってたって。食べ過ぎて動けなかったかもしれん。欲かきすぎて。そんな話しもある、最近で。」

3世帯5人程度の人のみが暮らす、稲又集落の望月ふみ江さん、94歳。「私の大切な箱庭」だと云う畑を守るため、朝と晩、日に二回づづドラム缶に火を入れる。熊や猪や猿の猛攻を、この老婆が立った一人で凌ぎ、闘っているのだ。

山形県鶴岡市羽黒町



出羽三山の中の最も急峻な山、標高1984mの月山を上る山伏一行。



「山伏とはなにか？ひたすら修行し、祈ることだ」と語る星野文紘さん。



庄内平野から望む月山。死者はみな、「あちら」へ還ると信じられている。

「日本人にとって山というのは、まあいわゆる日本の考え方からいくと山というのはまず女の身体を表しているんですね。そしてその身体の中でもやっぱり赤ちゃんが生まれてくる場所。そういうことを意味している。だから山に入って出てくるということは命を出てくる、生まれるということに繋がるんだね。そしてそうして生まれてきた命が、今度最終的にね我々が亡くなる時は、我々の魂も山に収まる。だから山というのは、まあ死と再生の場所という言い方の考え方が、日本にはしっかりしているということだね。」



羽黒山をハリウッド映画でも使われているカメラ、RED を持ち、山伏の格好で撮影するベン。当初の想定以上に、そのロケは厳しく、険しいものだった。文化の違いに対し様々な苦情を述べつつ、「一度現場に入ったら持てるすべてを捧げる」と言い放っただけあって、星野さんから「You are Yamabushi!」と評されるほど、どこまでもプロとして撮影し切った。

山形県西置賜郡飯豊町（にしおきたまぐんいいでまち）



置賜盆地に広がる屋敷林（やしきばやし）に囲まれた散居村の風景。屋敷林により、風雪から家を守ってきた。



中津川のマタギ中村輝一さんは、自らのことを「マタギ」と呼称しない。なぜならば「マタギだけではもう食えない」からだ。山にほど近い場所で、自給自足的な生活をする彼は「（電気がなくなっても）あんまり影響はないっていうかね。俺の場合はな」と呟く。

島根県鹿足郡吉賀町柿木



麦山からの眺め。



「アンテナ銀座」と呼ばれる麦山の山頂付近で撮影中、熊のものと思しき糞があった。島根だけではなく全キャラバンを通じて、日頃全く感じたことのない「獣の存在」に、やや恐怖を感じながらの撮影が続いた。



オーナー制度、トラスト制度の導入で息を吹き返した大井谷の棚田。まだ問題は多いらしいが、それでも他の農村が見習う点は多い。



自身が通われ、今は廃校となりリノベーションされた中学校の教室で、オーガニック野菜を中心としたカフェを経営している面代佐美さん。



福原圧史さん



埼玉からＩターンの小林健吾さんと、葛を使って様々な手工芸品を作っている三浦ちづるさん。

元柿木村の役場で働かれていた福原圧史さん、63歳。現在は農家をしながら、「ＮＰＯ法人ゆうきびと」という組織の会長をされている。彼の畑で作業をしている手を止めてもらい話しを伺ったのだが、その風貌からはおよそ行政的佇まいを感じさせない。しかし、ただの農家ではない理知的な瞳がこちらを見つめていた。彼は柿木の大井谷棚田で実験的に行われたトラスト制度／オーナー制度の立ち上げ者として、知る人ぞ知る存在である。

「食品」と「食べ物」は違うという。ただ、「食べ物」を作るだけであると。「食べ物」に農薬がいるのか？それを子供たちに食べさせたいだけだ。農薬を使って一番被害にあうのは、農家だ。やめなければいけない一番の理由は、そこにある。頷く。今までのキャラバンを通して、ここまで洞察の元に吐かれた言葉を聞いたことがなかった。

彼の取り組みから30年。今や多くの人にその考え方は共有されている。この地の小学校中学校の給食では、80％以上地元の食材の使用という驚異の数値を誇り、かつ多くが理念ベースのみに堕していそうな食育を、実際に郷土愛に繋げるために子供たちに施しているのだから驚きだ。小学校の給食を取材したが、子供たちは誰一人残さずに完食していた。栄養教諭も平然と話しているが、とてつもないことだと思った。いや、他にもありとあらゆる人が、カフェのオーナーや、地域再生のためにＮＰＯを立ち上げられた自動車業の社長や、Ｉターンの農家やＮＰＯ職員等々の……ありとあらゆる人が、平然と「あたりまえ」だという。言われてみればたしかにそうだ。が、誰もがそう言えるわけではない。そこに柿木の凄さがある。

沖縄県南城市知念久高島



満月の夜の浜。引き潮のため、珊瑚礁の棚がみるみるうちに広がっていく。ここで深夜にイノー漁が行われ、タコや貝が採取されている。



「もう昔のことはあまり思い出せない」と云う内間秀子さん。ぼそぼそと記憶を辿って語ってはくれるが、それらは線や面にならず、点のままである。



彼が「久高銀行」という浜に立ち両手にタコを持つ西銘用勝さん。

不思議な島だ。なぜかキャラバン隊全員が、ここに足を踏み入れた瞬間、眠気に襲われだした。形容するならば、「実家」のような雰囲気なのだ。

ここは琉球王朝が聖地として崇めていた場所である。数多くの祭祀が執り行われ、未だに現代人が「迷信」だと思うような多くの禁忌の世界が続いている。たとえば土地の概念が変わっている。個人所有という概念が存在せず、すべては島の共有財産なのである。

これまで多くの民俗学者やメディアがこの島に押し寄せてきたが、中でも一番の目玉は「イザイホー」という儀礼で、31歳以上の女性が「神」になるために12年に一度行うのだが、1978年に行われたのを最後にしてそれは途絶えてしまった。そういった宗教的、信仰的側面がまだ残っているものと勝手に考えて久高島まで赴いてはみたものの、行ってみるとそれは「すでに終わったこと」と皆に強い口調で繰り返されてしまった。あまりにも浅薄であった岡本太郎の聖地クボー・ウタキへの突入事件や、メディアの風葬地への侵入などが立て続けにあったせいか、カメラを持ったものへの不信感が根強く、キャラバンを始めてから最も撮影は難航した。

いつ行っても漁が出来、それを換金できるから銀行みたいだろ、と西銘用勝さんは云う。難航していた取材が、彼に会うことによって進みだした。そして「最後のノロ（聖職者）」として有名な西銘シヅさんの甥にあたられることも取材を通して判った。余り語ろうとはせず口は重いが、彼の中に「昔の久高」は、たしかに息づいているのは感じられた。そして「イザイホー後」の未来を彼は見据えている。



フボー・ウタキ（御嶽）。久高島のみなら、沖縄最高の聖地。男女問わず全面的に立ち入りが禁止されている。中は何もなく、ただ広場のようなものがあるらしい。まさしく森の上にある無社殿の神社と類似していると云えよう。また本編に登場するイシキ浜という伝説の浜からは、石一つ持ち出すことは許されてはいない。そこはまさしく、「神の領域」だからである。

「日本に歸る」

このキャラバンの内容を、一言で表すならばそうなるのかもしれません。

実際に正月や盆で里帰りされる方も多いでしょうし、そうでない方も多いでしょう。ですが、その「故郷」の近辺に、都市伝説や噂や「……らしい」とか、言われているような場所がないでしょうか。

日本という国は、ほんとうに多様な国であると、このキャラバンを通して感じました。飛行機に乗ってしまえば、ただの点景か雲の下としてしか認めない、三・四時間程度で北から南まで行き来できてしまうような小さい国ですが、その点景に赴き、参詣してみると、想像を絶するくらいの深みと、違いと、類似性がありました。それは、「ちょっとだけ奥」だったり、「このトンネルを抜けた先」だったり、「あそこの山の中」だったり、「遠くに見える島」だったりするはずです。行こうという意思を持てば、そんなに難しくはないところです。

そういう「僻地」や、「秘境」もたしかに僕たちの国であり、連続した道の先にあります。そこに知らなかった方言があり、もの凄い祭や面白い形のお面や装束があり、踊りがある。鹿やタヌキやイノシシや熊を狩り、様々な山菜や自然の恵みを頂く文化がある。それらが、本来僕たちの文化的拠り所とするべき「日本」だったのではないかと思います。

その土地〳〵が苦しんでいます。ご承知のように高齢化、過疎化、そして獣害です。

又、山に住む人々にとっては、この30年たらずの「森の放擲」によって起こる、生命の危険につながるような様々な災害が起こりつづけてもいます。それは、僕らにとって無関係ではないのです。それは「ちょっとだけ向こう」で起きているのです。

本編をご覧になられれば分かると思いますが、本来のあるべき「森」の姿は、今現在のそれとはかけ離れています。本来の森の土はフカフカで、弾力があり、ゆえに保水力があります。今のそれは「河原のよう」と誰かが表現したように、固く乾ききっています。一部の鎮守の森や無社殿の神社がるような山の上の森では、そのようなフカフカな土がかろうじて残されていますが、材木の自由化が決められてから以降、たった30年たらずであらゆる生命にとって大切だったはずの「森」はそのように推移してしまったのです。伐るべき木、そして伐ってはいけない木の見極めが大事なのです。しかし歴戦の山師たちが「なんとかして欲しい」と悲哀を浮かべて呟かねばならぬほど、森は「限界」に近づいてきています。

「過疎」あるいは「限界集落」と表記すると、そこに塗炭の苦しみや、孤絶された悲壮感のような印象を抱きますが、実際に「ちょっと先」へ踏み入れてみると、そこには楽しみや笑いやありえないほどの思いやりや暖かみがありました。しかし、その人たちの闊達さの裏にひそんでいる孤独は、とても深いとも感じもしました。

今回五人の海外（フランス、イギリス、ニュージーランド、マレーシア、シンガポール）の個性あふれる優れた作家たちと、北は山形から南は沖縄まで旅をしてきて、僕はそういう「日本」が、本当にかけがえのない、貴重な、守るべき、受け伝えるべき、愛おしむべき存在であると強く思うのです。

企画の詳細を作っている段階で、「結び目」という言葉が浮かびました。自然と人、森と人、神と人……或は都会と田舎。そのような結び目を形作るための、様々な「糸」を拾い集め、探し求めてきたように思うのです。けっして完全ではありませんし、網羅もしきれていません。ですが、これは僕らキャラバン隊なりに、精一杯飛び回った記録なのです。どうなるかどうかは分かりませんが、できれば、今後も続けていきたいと思っています。刻一刻となにかが失われつつあります。それを、できるだけ多く映像により、記録していきたいと私たちは考えていますし、それを都市部からではなく、四国の山奥から発信していくということに意味があるのではないかと考えています。

これから様々な地域でこの映画を上映しようと思っています。ぜひ、この映画をご友人やご家族とともに見、それから年長者に昔話を聴いてみてください。或は住まわれている近くの山に登り、森に入ってみてください。きっと余分な言葉が消えていくはずです。それは沖縄の西銘用勝さんが話していた、神聖な場所に入ると「言葉がまったくしゃべれなくなる感覚」に近い感覚だと思います。それが「森＝杜」に入るということ、であるとも。

かつて、その「何ものか」を敬うという意識が、「産土神」を祀るという儀礼になり、そこからすべての生活がデザインされ、無駄のない調和のとれた「暮らし」が営まれていました。島根県柿木の福原さんたちが「人間にとってあたりまえのこと」と言われるような「暮らし」です。21世紀の現在、そこに完全に戻ることは不可能です。ですが、「ちょっとだけ向こう」に足を踏み入れると、都会人にはフィクションかと目を疑ってしまうような世界が未だに現存しているということもまた、事実なのです。その中には受け継ぎ、取り戻せるものも、まだ含まれているはずです。

この映画で取り上げた様々なインタビュー、それは本当は我々キャラバン隊ではなく、「あなた自身」がそこに歸って、大切な誰かに傾聴すべきであった話しである。僕はそう信じています。

平成二十五年二月十日　長岡 参



本映画は、徳島県神山町の NPO 法人グリーンバレーが企画しました。
全国の 6 ヵ所の地域を、神山町に住む映像作家長岡参と、5 人の外国人作家がともに旅して
撮影した「森と共に生きる暮らし方」探訪キャラバン 2012 の活動をまとめたものです。
今後も引き続き、プロジェクトを継続させていきたいと思っています。
facebook のページにて、情報を発信していきますので、よろしくお願いします。

